東京外国語大学論集第 97 号 (2018)
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES, AREA AND CULTURE STUDIES 97(2018)

「赤いウィーン」の自然思想
—自然の友によるカラロとの断絶を問う
Thoughts on Nature in Red Vienna
Putting a Question to Discontinuity of Angelo Carraro by “The Friends of Nature”

古川　高子
FURUKAWA Takako

東京外国語大学世界言語社会教育センター
Center for Global Language and Society in Higher Education,
Tokyo University of Foreign Studies

はじめに
1. 「赤いウィーン」の身体・自然思想
　1.1. 環境決定論と新ラマルク主義–自然科学者の結びつき
　1.2. タンドラーによる「赤いウィーン」の身体衛生思想
2. 世界観としての自然科学
　2.1. 自然科学思想の変遷
　2.2. 自然科学学習の政治的利用
3. カラロとの断絶事由考察
　3.1. フライデンカー同盟の分裂とカラロ
　3.2. カラロとアナーキスト
　3.3. カラロの思想
4. 1925 年以降の『自然の友』誌に示された世界観
　4.1. 社会中心主義—エーレンボーゲン
　4.2. 「外部の自然」により「内部の自然」を高める–ハルトヴィヒ
おわりに

キーワード : 赤いウィーン、自然思想、フライデンカー、自然の法則、優生学、新ラマルク主義
Keywords : Red Vienna, Thoughts on Nature, Freethinker, Law of Nature, Eugenics, Neo-Lamarckism

本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

【要旨】

本稿は、オーストリア社会民主党の登山家協会自然の友が、世紀転換期の設立以来有していたリベラルな自然思想を戦間期に入ると断念し、国民育成を積極的に図ろうとする党のナショナルな思想を受け入れていく経緯を明らかにしようとするものである。1911 年から自然の友の自然科学学習を担っていたフライデンカーのカラロは、労働者が自然界の自然の法則を学び、それを社会に当てはめて現実社会の出来事を理解し、より良く生きる術として体得すべきだ、と主張していた。だが、第 1 次世界大戦後、その思想を社会制度批判に向け、アナーキストに近寄って社会民主党を批判するようになった。一方、戦間期ウィーン市政を執った社会民主党は、労働者のための政治を展開させ、健全な国民育成を図って将来の社会主義社会を達成するために、登山活動を広く担ってきた自然の友をその傘下に収めていく。自然の友も政治的対立によってブルジョワ登山家協会所有の小屋利用が絶たれたため、自前の小屋を建設せざるを得なくなり、その資金を求めて党に近寄った。そして、党の方針を受容した自然の友は、リベラル思想を推奨して党を批判したカラロとの関係を絶ち、自然を人間のためのみに用いて未来の社会主義社会を作ろうとする論者を採用し、フライデンカー的世界観の含まれない自然科学学習を推進するようになったのである。

Main theme of this article is to clarify the change of the thoughts on nature in "The Friends of Nature", an alpine club for workers in "Red Vienna". That is a procedure from liberal thoughts on nature since the fin de siècle in Austria to national ones in the interwar period, which was developed by the Social Democratic Party of Austria. Angelo Carraro, a Freethinker and Anarchist, had taught Natural Science at the Natural History Section of the club since 1911, but suddenly in 1925 he was fired and since then, even one of his articles on nature was not in the magazines of "The Friends of Nature". Why did it happen? Because Carraro, who was against the hegemonic powers, began to criticize all of the institutes of the societies, including the Party, and approach to a famous Anarchist on the one hand, but on the other hand, "The Friends of Nature" got closer to the Party, as they wanted to get support funds in order to build mountain huts in the higher mountains. After that, its alpine club's articles on nature were written by the authors who claimed that nature was only regarded as resources provided for human beings. They advocated that a Socialist Society in the future would be consisted of healthy nation that would be created with valuable natural resources. The new authors' world-views were different from that of Cararro who asserted a symbiotic world in the nature. "The Friends of Nature", therefore, agreed to the future plan of the Party, but not to the Freethinker's.

はじめに

人は自然に何を求めるのか。その問いは、19 世紀末、オーストリア・ハンガリー二重君主国の首都ウィーンにおいて、労働者層の地位や健康改善を願った社会民主党員にも共有されていた。周りを山に囲まれた盆地で空気の流通が悪い上、産業資本主義の発展に伴う農村からの人口流入により、1900 年前後には 200 万人余の大都市となっていた工業都市ウィーンでは、職場・住居環境は劣悪化の一途を辿っていた。そのウィーンにおいて、1895 年、小学校教師シュミードルの周りに集まった社会民主党員らが、登山を労働者たちに広めるための組織として自然の友 Der Touristen- Verein „Die Naturfreunde“を設立した。当時、ウィーンにはブルジョワジーによって設立された大規模な登山家諸協会があったが、それらに属していた登山家で、社会民主主義思想に共鳴した人々が、空気の良い山地で登山を行うことにより労働者の肺や身体を鍛え、健康改善を図ろうとしたのであった。

登山家協会に属する登山家は、登攀能力ばかりではなく、山地の気象、地形、動植物といった自然科学系の知識を有する必要があったため、自然の友もそれを労働者会員に教授することを重視し、設立当初から自然科学の読み物を機関誌に掲載し、1911 年には専門的な博物学部門を作り、そこにフライデンカーの理科教師カラロ（Angelo Carraro : 1862～？）を投入した。フライデンカーは、この世に神は存在しない、と考え、世界を自然科学的合理主義により把握しようとする世界観[1] を有していた。自然の友を設立したシュミードルら当時の自然の友の指導層は、みなこのフライデンカーであった。二重君主国のオーストリア側（以降オーストリアと略記）ではカトリック教会の権力が強く、その支配は政治や教育にも及んでおり、これに対抗しようと社会民主党にはフライデンカーが多数加わっていたのである。だが、フライデンカーは、専ら社会民主党員からなっていたわけではなかった。1869 年にカトリック教会の支配を嫌った一人の僧侶により結成された「理性の自由教会」が、1887 年に「ウィーン無宗派教会」となり、1894 年にはダーウィン生誕 60 周年を記念して「下オーストリア・フライデンカー協会」（以下フライデンカー協会と略記）と名称を変更した。そこには、キリスト教からの解放を求める多数のブルジョワジーが所属し、彼らは、自然の法則 Naturgesetz による世界の支配を説き、今生と来世、肉体と精神・魂、神と人間といったように世界を二分法で捉えることを否定し、自然と神の一致を唱える一元論を唱えていた。そのため、一元論者とも呼ばれ、理論をより重視する「一元論同盟」も設立された。一元論同盟とフライデンカー協会との双方に所属する人々が多く、1919 年には、これらの組織をゆるい形で統括する「ウィーン文化協会自由同盟」（以下自由同盟と略記）が設立され、ともに活動するようになった。この同盟には、オーストリアで著名な科学者たちと並んでシュミードルやカラロも創設者として加わっているところからわかるように、彼らは、党員ではあってもウィーンの教養市民層に属する人々だったのであ

る［Sertl 1995; 古川 2002: 2008］。

さて、第一次世界大戦敗戦後、共和国となったオーストリアの首都ウィーンでは、1919 年から 1934 年 2 月まで社会民主党が市政を執り、多彩な労働者文化と組織を発達させ、労働者のための都市を築いたことから、「赤いウィーン」と呼ばれていた。その下で自然の友も力を伸ばし、社会民主党の青年組織とも連携しながら、会員数を戦前の約 1 万人から 1923 年には 7.5 万人へと増やした。社会民主党は、大戦前には自然の友をはじめとする体操協会等を軽視していたが、戦間期になると、文化を政治運動の一部としてみなし、社会変革的観点を有するスポーツや余暇組織を作ることに熱心になった。労働者の身体文化を育成し、ブルジョワ文化への対抗文化を創り出すために統合団体を創設したのである。自然の友はその中で指導的役割を果たすようになっていた。一方、登山の大衆化に伴う小屋利用の増加に加えて、政治的対立が生じ、ドイツナショナルに与するブルジョワ登山家協会ドイツ・オーストリア・アルペン協会（以下アルペン協会と略記）は、それまで社会民主党の自然の友に与えていた協会所有の避難小屋（以下小屋と略記）利用時の割引料金を廃止してしまった。そのため、会員が利用できる小屋が減った上に、会員数が膨れあがった自然の友は、自力で小屋を建設せざるを得なくなり、その資金を党に頼ることになった［古川　2014］。

このような状況の中、自然の友は、戦前から機関誌『自然の友』に継続して掲載されていたカラロによる自然思想のコラムを、1925 年、突然取りやめ、以降、カラロの論考は 1932 年になるまで機関誌から姿を消した［古川　2018 : 15］。本稿は、その理由をカラロと自然の友、そして党との関係から問い、彼の思想と党の自然思想を比較することで明らかにしていく。それは、世紀転換期から自然の友において続いていたリベラルな思想と戦間期の党による国民形成を意識したナショナルな思想との接触によって生じた変容を明示することを意味している。

これまで自然の友の自然思想については、1905 年以降に設立されたドイツ諸支部を統括するドイツ事務局とオーストリア・ウィーン中央委員会の思想を比較する形で研究が進められてきた。その背景には、1933 年ドイツ事務局がナチ政権に同意を表明したという事実があった。そこから、ドイツ事務局は、自然を宗教化・イデオロギー化して、生物学的・社会ダーウィニズム的に解釈する一方で、ウィーン中央委員会は、労働者側に立ってはいたものの、工業技術、産業の発展を重視し、自然を用いて労働者の再生産力を発展させる思想を有したゆえ、ともにブルジョワ層の自然思想と変わらなかったのだ、とリンゼやツィンマーは解釈した［Linse 1986: 1991: 1993; Zimmer 1991］。しかし、ウィーン側にも自然を宗教化するフライデンカーが存在しており、また、後にナチ党員となる通俗科学・植物学者フランセ Raoul Heinrich Francé をウィーン編集の『自然の友』でも高く評価していた点から［*NF* 1911: 161-162, 190; 1926: 78］、ドイツとオーストリアを区分し、ブルジョワの自然思想をナチのそれともっぱら結びつける観点で

は、ウィーン中央委員会にあった思想と戦間期に新たに流れ込んでくる思想との連続や断絶は明らかにならない、と考えられる。

これに対し、自然思想の言説を労働者運動全体における自然の意味、という観点から考察したのがサントナーである。彼は、ドイツおよびオーストリア社会民主党員による自然や身体についての思想を分析し、活動例として自然の友と節制協会を挙げ、労働者運動に「外部の自然」、すなわち人間の身体を取り巻く自然環境、及び「内部の自然」、すなわち人間の身体、という二つの自然概念が存在し、外部の自然を内部の自然のために利用する考え方があったことを明示した［Sandner 1999］。彼の著作には、『自然の友』誌に掲載された自然に関する言説のほとんどが網羅されており、この点でリンゼやツィンマーの一面的な把握と比べて、自然の友には多様な自然思想があったことが示され、評価できる内容を有している。しかし、サントナーは、自然の友の思想を歴史的に分析するという手法を採っておらず、約 15 年に渡って連載されたカラロの文章も最初期の論文一本に言及されているだけであり、なぜ、ある時期に、ある自然思想が誌面で語られなくなったのか、といった変化や党との関係などには触れなかった［Sandner 1999: 191］。

本稿が扱おうとするカラロとの断絶という問題は、これらの諸研究が依拠するブルジョワ階級と労働者階級の対立という視点からでは明らかにならない。なぜなら、自然の友にはブルジョワジーである教養市民層のリベラルな思想が強く流れ、さらに、彼らは、ブルジョワ登山家協会との密接な繋がりを求め、ブルジョワ登山家から軽蔑されないよう教養や登山家の振る舞いを会員に教授することを重視していたからである。一方、社会民主党は、世紀転換期以降、自由主義を担ったリベラル政治家が解決できなかった社会問題を、オーストリアに居住するドイツ系住民（＝ドイツ語話者）であれば誰もが平等に暮らせる「国民社会」[2)]を作って解決しようとする大衆政治運動を担っていた。その延長上に、戦間期の「赤いウィーン」は形成されていた。いわば、自然の友にとって戦間期は、従来から維持されたリベラルな思想が、ナショナルな思想へと結ばれ、変化する時期に当たっていたのであり、カラロとの断絶は、その契機だったともいえる。本稿で議論する内容は、二重君主国からその承継国家の一つとなるオーストリアにおいて、リベラルな思想を受容した組織が、国民形成を担うナショナリズム運動によって、いかなる変貌を遂げるのか、あるいは基層にリベラルな思想が流れ続けるのか、といったリベラリズムとナショナリズムの連続性・断絶性を明らかにする現代史研究の潮流に貢献するものである［Judson 1996; 2006; Zahra 2010; 古川 2014］。

以下、「赤いウィーン」で展開された環境決定論や優生保護についての自然思想を先に提示した上で、自然の友で行われてきた自然思想・自然科学学習の過程を振り返りながら、カラロとの断絶およびその理由を検討し、最後にカラロの論考以降、『自然の友』誌に掲載された思想と

を比較考察して、自然の友が啓蒙よりも未来の社会主義社会実現のために、もっぱら自然を身体に取り込む思想を受容したことを明らかにする。

1. 「赤いウィーン」の身体・自然思想

1.1. 環境決定論と新ラマルク主義–自然科学者の結びつき

自然の友は、第1次世界大戦前、環境によって人間を変えることができる、とする新ラマルク主義の影響を受けた環境決定論を受容していた。外部環境としての自然は、人間の意識から独立した存在であり、人間が創造し、所有する人工物とは相対立する、と捉えられていた。だが、19世紀の進化論の拡大とともに、社会環境と人間の関係についての思想が深められ、自然を含む環境によって人間の生活ばかりではなく、人間自体も変化する、とみなす思想が生まれてきた。これに対し、人は環境によって一方的に影響を被るばかりではなく、人間の理性に基づく主体性を重視し、それが外部環境をも変化させ得る、とする説も唱えられた。たとえば、マルクスは、人間は環境と教育の所産であると同時に人間は環境をも変えることができる、と主張したが［マルクス/エンゲルス 1996: 108-113］、その延長上に社会民主党による労働者運動の自然思想があった。社会民主党は、外部の自然を労働と生産過程の要件として、また、自然科学的知識を社会的進歩の動因として、社会主義的生活改革を進めていく上で必須のものだとした。環境としての自然は社会的矛盾と疎外が克服される「自由の国」（マルクス『資本論』第48章）が実現される場所であり［Sandner 1999: 11］、人間内部の自然が生み出す欲求（＝身体的欲求）が提示される場だととらえ、人間の欲求に見合う自然を積極的に活用して、人間に役立てていこうとしたのである[3)]。

このような人間の主体性が関与する自然理解と適合的だったのが、獲得形質の遺伝を唱える新ラマルク主義であった。その学説は、ドイツではヘッケルにより、オーストリアにおいてはマダラサンショウウオの獲得形質の遺伝に関する研究を行ったカンメラー（Paul Kammerer: 1880-1926）により主唱され、社会民主党に受容された。新ラマルク主義は、環境要素が遺伝子に作用して遺伝するという一つの遺伝子学説である。社会は、自然淘汰という変えられない自然の法則としての進化論の下のみにあるのではなく、獲得された形質も遺伝し、人間の目標設定や形成能力に環境が影響を与えることができる、という主張であった。

この主張を在野の社会生物学者であったゴルトシャイト（Rudolf Goldscheid: 1870-1931）も受け入れた。彼は、社会生物学の基本原則は、自然の法則に基づく発展を目的により制御できることにあるとし、「有機資本」である人間は、計画的な発展を行える器官を有しているゆえ、管理システムを改良することでより良くなるはずだ、と述べた。ゴルトシャイトは、1910年、ウィーンで社会学協会を創設するが、その際、社会生物学・優生学部門を作り、タンドラー（Julius

Tandler: 1869-1936）を部門代表者に、またカンメラーを書記とした。また、カンメラーは、カラロと友人同士であり、一元論同盟に共に属し、ゴルトシャイト、シュミードルとともに自由同盟の幹事なっていた。カンメラーは、ウィーンの「科学研究所」（1903 年設立、1914 年から「オーストリア科学アカデミー」）の代表的研究者でありながら、労働者区にある民衆の家で博物学部門の労働者教育にも携わっており、リベラルな民衆啓蒙の代表者とみなされていた。『自然の友』誌には、カラロが去った後にもカンメラーについては詳細な報告が掲載された。こうして、第 1 次世界大戦前後までに、ウィーンの自然科学研究者たちのサークルで先導的な役割を果たした人びとが、自然の友においても自然科学教育や思想を担当していたということが理解される。自然の友は、カラロやカンメラーを通じて環境決定論や新ラマルク主義を受け入れていたのである［*NF* 1913: 233; 1926: 222-223; 1933: 141-143; *M. Wien* 1919 (9/10) : III; Byer 1987: 90-93; Sertl 1995: 116; Baader 2007: 93-97, 108］。

1. 2. タンドラーによる「赤いウィーン」の身体衛生思想

19 世紀後半以降の産業資本主義の進展による社会問題から生じた状況を、一部の知識人や政治家は、「退化」や「病」である、とみなすようになっていた。オーストリアにおいては世紀転換期に反ユダヤ主義が広がるとともに、都市を緑化し、農村の農民文化を掘り起こし、都市と結びつけることでドイツ系住民の人口減少を食い止めようとする都市再生運動や健康増進のための禁煙禁酒運動など、様々な潮流をもった運動が出現していた。その後、第一次世界大戦が起こって人口が大きく減少したため、退化思想は、より現実味を帯びた。戦間期にウィーン市社会衛生局長官となって「赤いウィーン」の社会政策を担うタンドラーは、大戦中の 1916 年、「戦争と住民」と題する講演を行い、戦争が人口の中で最も再生産能力のある若者の命を奪うことを退化だとし、それを予防する必要を唱えていた［Farkas 1992: 15-28, 269-286; Baader, 2007: 113-117］。

第一次世界大戦敗戦直後の 1919 年夏には、ウィーン市の衛生管理は崩壊しており、住民は栄養失調に苦しみ、スペイン風邪や肺結核、さらに性病が蔓延していた。こうした状況を解決するために戦争中から人口問題について発言を行っていたタンドラーが、1920 年 11 月、ウィーン市の福祉や社会衛生管理を任された。彼は、当時の科学的潮流の最先端にあった社会ダーウィニズムと優生学や新ラマルク主義思想とを組み合わせることで、市の福祉政策システムを作っていった。予防的方策を重視し、若者を重点的にケアすれば、それだけ老人のケアが減る、という発想を持ち、福祉を提供するのを社会の義務とし、個々人には福祉を享受する権利がある、と主張していた。彼の施策により、1923 年には最大の死亡原因となっていた肺結核による 13.4％の死亡率は、1932 年までに 9.3％に減少した［Maderthaner, 2006: 30-31; Exner 2007: 195;

Dasroteswien］。

タンドラーの政策は、このように病気予防や人口育成については効果的であったが、ゴルトシャイトの発想である「有機資本」を土台にして考えられていたため、人間を金銭に換算する合理的な側面もあった。1922 年、ウィーンに居住する約 400 人の痴呆・精神薄弱児に市民の税金から支出されている高額な助成金を、「貧しい両親のノーマルな子供」に与える可能性を模索すべきだ、とタンドラーは主張し、1928 年には精神病患者の再生産能力を絶つべきである、とまで述べるに至っている。彼は、酒飲み、あるいは犯罪者で責任感のない親の多産は、非常に危険であり、価値のない者が増える恐れがある、とも訴えた。つまり、価値のある子供には市が支援するが、消費ばかりする価値のない子供は余計者であるゆえ、生まれるべきではない、という考え方を持っていたのである。一つの社会において高価値の遺伝子を優遇する積極的優生学も、経済的要因も含めて社会の住民全体が考慮されるとき、低価値の遺伝子は残すべきではない、という消極的優生学へと移行し、社会全体の幸福の名の下に個々人の幸福が犠牲にされ、安楽死を肯定するに至る。タンドラーは決して安楽死を擁護していたわけではないが、「100 年後でも…医者は低価値の者を殺す権利は持たないだろうが、彼らが生まれてくるのを妨げる権利は持つようになるだろう」と 1932 年には主張した［Baader 2007: 130-135］。

社会民主党は、新ラマルク主義の影響を受けた環境決定論に基づき、診療所や洗濯室、幼稚園等が備わった住宅団地の建設を通じて、戦間期に約 6 万戸の住居を確保し、住環境を整えた。そして、労働者向けの私営結婚相談所を設け、健全な「人種」を生み出せるように計らったが、タンドラーは、これも支援した。労働者を清潔な住環境に住まわせ、生活を改善し、適度な運動と栄養を摂取した健全な身体の獲得・維持、健康で優良な人口を再生産・育成できるような結婚を推進し、国民的安定を求めたのである。社会民主党書記でもあった自然の友会長リヒターは、1932 年には小屋建設がヴァンデルン（＝山歩き）の促進となり、福祉費用の節約になる、という考えを大会で披露するようになっていた。自然の友は、こうして「赤いウィーン」の健康政策を担う存在になっていくのである［NF. Protokoll 1932: 96-97; Weindling 2009: 90-100; McEwen 2012: 46-48］。

2. 世界観としての自然科学

2.1. 自然科学思想の変遷

自然の友が成立して間もない 1895 年 10 月の協会運営会議に集まった指導層は、自然科学分野の教育に重点を置き、自然科学の学習部門を協会内に設けることに同意した。以降、自然の友は、協会誌に自然に関する随筆を掲載し続け、自然科学学習の講座を開いた。その流れの上に、カラロが担当する博物学部門が 1911 年に設置される。自然の友が自然科学学習を重視した

のは、自然の遷移・循環、進化、生存競争といった自然現象を観察することで、世界が自然の法則により統治されていることを学ぶためであり、その自然界の知識が彼らの直面している日常の様々な問題を解くのに役立つ、と考えられていたからであった［Winterer 1955: 16; *NF* 1898: 27; 1900: 13; 1911: 16-17］。しかし、そればかりではない。第 1 次世界大戦前の『自然の友』誌における自然科学的文章は、1. 動植物観察記とダーウィニズムに関する科学的理論、2. ブルジョワ登山家協会の自然科学的記事や景観・自然保護に関する記事の転載や模倣、3. 登山の際に必要な自然科学的知識の三つに分類できる。このような記事を労働者が読んで知識を増やし、ブルジョワ登山家協会会員と同等に登山を行えるようにすることも企図されていたのである［古川 2008: 480］。

1911 年 1 月号のコラム「ツーリストと博物学　ウィーン博物学部門の課題と目標」から始まるカラロのシリーズは、ブルジョワ登山家協会との関係を維持し、登山家としての常識を普及させることが企図されたものではあったが、社会民主党による文化組織統合策強化への一つの対応策でもあった。社会民主党に賛同している証拠を、カトリックとは異なるフライデンカーを強調することで示す必要があったのである。そのコラムは、編集部がカラロに依頼したものだった。このことは、『自然の友』誌全体で彼を褒め、また、彼の文章が読者に受け入れられていたことも随時、誌面で紹介されている点から理解される。［古川　2008］。

第一次世界大戦が始まると、『自然の友』誌には、特に自然と人間の関係についての論考が目立つようになった。戦場の状況を知らせる「戦場からの声」というコラムにも戦争と人間の関係が自然を用いて描写された。冬の寒さや氷雪と戦争の殺戮が同置され、冬から春に変わるように、戦争が終わり、春が来る、そうすれば大きな自然の寺院に飛び出すことができ、人間の勝利を祝い、諸民族が手を取り、永遠の神聖同盟を結び、喜びの声が諸国を巡る、地球の人間たちに平和を、と論者は主張した［*NF* 1915: 290-291; 1916: 8, 113, 115］。

環境としての自然に関心があった『自然の友』の執筆者たちは、人間の生死を分ける闘いを体験し、人間と自然との関係に興味を抱き始め、それへの関心が、自然は人間を癒やす手段である、という発想を生み出した。1917 年、自然の友の編集長ハピッシュは、「目的と未来」と題する文章を書く。そこでは、自然科学学習こそ私たちに課された最も楽しく、誇るべき課題であり、フォルク（民衆）を治癒するためのものである、と主張された。そして、1919 年には自然の友設立時からの主張であった「飲み屋から自然へ」というモットーを再掲し、八時間労働が手の届くところにある今こそ、自然享受が可能な人々にヴァンデルンを教えるべきだ、と訴えた。こうして、戦争が人間を破壊するだけでなく、自然をも破壊することを現実に体験し、外部の自然が内部の自然である人間にとって重要な存在であることが確認され、「赤いウィーン」の自然思想を受け入れる下地ができていったのである［*NF* 1917: 110-113; 1919: 74-75］。

戦時期から戦後にかけてのカラロの論考も、戦争と人間の関係についての言及が多くなった。彼は、戦争を動植物の生存競争にたとえ、動植物は相互に理解し合い、お互いに扶助することを知っているからこそ人間の争いよりは激しくない、と述べ、理性を保有する人間は、それをもって争いに対処すべきだ、と説いた。カラロは、各地の自然の友諸支部で講演を行い、戦後は登山学校の講師として「動植物の生活」と題する講義も行った。自習用の本の問い合わせに回答する、といった会員へのサーヴィスも引き受けていた。『自然の友』誌での論考も、20 年代初頭、フライデンカー同盟分裂問題（後述）が生じた時期を除いて 1925 年半ばまで続いた。1920 年代前半には、たとえば、ブラウン運動を行う小さな粒子がいかにして周りの世界に大きな影響を与えているのかを描きながら、「最小のものたち」がハンマーを打って働き、大きなものを造るのは人間全体を一つにするためだ、と労働の意味を説いた。そして、自然の法則によって支配されているこの地球上では、あらゆる人間と動植物はすべて兄弟であり、「お互いのために働き、生きる」ようにできている、と述べる。1925 年 5/6 月号では「ヴァンデルンと世界観」を執筆するが、自然科学の知識を持って、ヴァンデルンをしながら自然観察をすることで自然の秩序を学び、それを世界観とすべきだ、という従来からの主張が繰り返された。ところが、この論考を最後にカラロは、突如として『自然の友』誌から姿を消すのである［*NF* 1915: 16-17, 123-124; 194-195; 1916: 12-16, 179-180; 1924: 15-16, 50-52, 55-56, 78; 1925: 47-48, 71-73; *M. Wien* 1917 (1/2): I; (11/12): V; 1924 (7/8): VI］。

カラロによる論考の停止は、自然思想や自然科学学習とヴァンデルンを結びつける、という自然の友の方針がこの時点から変化し始めたことを意味していた。以降、自然に関する随筆は、思想性のない自然科学の概説や外部の自然をもっぱら人間のために用いよう、とする内容へと変化していく。カラロのように、一貫して自然世界の中に人間社会を読み込み、一つの世界観を表現するような記述は、ほとんどなくなってしまった。

2.2. 自然科学学習の政治的利用

自然の友では、戦争期にもヴァンデルンは続けられていた。1917 年の夏、その方法を改良する提案がニュースレターに掲載され、博物学部門設置以来続けられていた地理学、植物学、地質学の学習に民俗学が加えられた。自然観察ばかりではなく、人々が住んでいる社会つまり「私たちの豊かなハイマート」を観察すべきだ、というのが趣旨であった。また、1921 年のニュースレターでは、ウィーン支部で宣伝活動用の講演や執筆を行うためのアカデミックグループの結成が報告された。そして、活動に必要な自然科学や民俗学的なものを収集しているゆえ、ヴァンデルンで見つけたものを持ち寄るよう、会員に伝えている。この点から自然の友は、自然科学ヴァンデルンに加えて民俗学的な知識も含み込んだヴァンデルンを本格的に開始しようと

していた、といえる［*M. Wien* 1916 (1) : III; (3) : II; 1917 (7/8): III; 1921 (7/8): V］。

一方、カラロが独自のフライデンカーの協会を立ち上げるために、自然の友から離れていた 1920 年から 23 年の時期には、露天掘りを見学する社会ヴァンデルンや自然科学上の疑問に答えることができる会員を図書室に待機させる、といった方法で、自然科学学習継続の意欲を示していた。1923 年、ハピッシュは、自然科学の知識なしでヴァンデルンするのは、根のない幹と同じであり、精神無しの純粋な本能的行動になってしまうゆえ、生物学の勉強をしよう、と激励している。ここから、同時期は従前通り、自然科学学習を続ける意志は持ち続けたが、それを担う講師が不在である上に、激励が必要なほど関心が薄れていたということがわかる。そして、1926 年 11/12 月号には、冬期間の自然科学的教養をつける試みとして教養委員会（＝アカデミックグループ）が民俗博物館と自然史博物館のガイド付き見学を用意した、という記事が出るが、それ以降、自然科学ヴァンデルンは行われなくなってしまった。その一方で、1927 年 3/4 月号には自然科学を専攻する大学人（博士や私講師の肩書きをもった人々）の専門的論文が『自然の友』誌に掲載され始める。同号にはウィーン微生物研究所講師による顕微鏡を用いた微生物や植物の断面図写真が入った解説記事も載ったところからみても、この頃には自然科学についての学習を再開しようとする動きが出てきたのは間違いない［*NF* 1921: 25; 1923: 16; 1927: 55-57, 61-62; *M. Wien* 1926 (11/12): V; 1927 (3/4): VI］。

但し、そこには政治的対立の意味合いも含まれていた。自然科学学習再開を告げたニュースレター1926 年 11/12 月号では、鳥類育成・水生物協会について紹介され、その 3.3 万人の会員の内 90%は労働者だが、協会トップは黒黄（君主制擁護者）、ナチ、黒（キリスト教社会党・カトリック）とからなっているゆえ、社会民主党党員は「そこから退会せよ！」と訴えられている。自然の友内に独自の鳥類愛好者の部門を作る予定も記され、設立目的には、動物の友の多くがブルジョワ協会に分散してしまっているゆえ、彼らを強力な組織にまとめることが必要だ、と主張されている。もとより、自然科学学習にはキリスト教的世界観への対抗的意味が含まれていたが、その趣旨は自然科学に基づく世界観を形成するためのものだった。しかし、1926 年には政治的敵対者への対抗が前面に出てきたのである。社会民主党は、1926 年 11 月、新しいリンツ綱領を採択するが、それは、ブルジョワ階級に対する労働者階級の対立路線を明示するとともに、党内左右両派の統一を求めたものだった。自然の友も、活動内容をその方針に沿って変更しなくてはならなくなったのである［*M. Wien* 1926 (11/12) : V; Berchtold 1967: 252-253; Braunthal 1961: 66］。

その後、1927 年 3/4 月号に自然科学についての記事が出て以降、1931 年初めに至るまで、自然科学的記事や自然観察遠足の様子は、『自然の友』誌やニュースレターには掲載されない。ようやく、1931 年はじめのニュースレターに、毎週日曜日、自然科学ヴァンデルンを行う予定

であるから、興味のある者は、事務所まで申し込むように、と記され、そして、7/8 月号で「一人のすばらしい博物学専門教師ティッシュが自然科学ヴァンデルンを率いてくれる」と紹介された。そこでは、既に 3 月から 6 月まで月に 2 回、計 9 回活動が行われていることが報告され、参加者数も平均して 24 名ほどあり、秋からも継続される予定だ、と述べられている。その後、1933 年 1 月に博物学の知識を会員に広める目的で「博物学協同体」が結成され、経験豊富な専門家や民衆教育家たちが時宜に応じた問題を扱うコースが開かれ、学習と遠足が行われるようになった。このような様子から、博物学協同体はカラロが指導した戦前の博物学部門を模倣したものだったことがわかる。しかし、協同体で講義をした講師の記した随筆は、カラロが示したような自然の法則や自然界を例えにして、現実社会についての意見を述べる内容を有していなかった。せいぜい擬人法を用いてナイチンゲールを「全歌手の中での女王」といったりする程度である。その点から考えるに、1931 年に新たに執筆を始めた講師たちは、フライデンカー的世界観を持ってはいなかった、もしくはそれを表現しなかった、といえるだろう。ハピッシュは、28 年大会で、協会で講演をしてくれる理科教師が欠乏していることを嘆くとともに、フライデンカーによる自然科学中心の世界観を評価はするが、活動における自然の友とフライデンカーとの人的結びつきを否定し、あくまでフライデンカーは手段として利用する、と断言した。自然の友とフライデンカーたちとの協力関係はない、ということを党にも会員にもこの大会で示し、その意図を形にしたのが、1931 年の博物学協同体だったのである［*M. Wien* 1931 (1/2) : V; (7/8) IV; 1932 (3/4):IV; (11/12) : XI; 1933 (1/2) : III-VI, VIII-IX; (3/4): III-IV; (7/8) : IV-V; *NF*, 1933, 32; NF. Protokoll 1928: 18-19］。

こうして自然の友創設以来続いた自然科学学習は、1925/26 年を節目にカラロとの関係を絶つことでフライデンカーの思想を含まない自然科学学習へと変容していく。その背景には社会民主党からの自然の友への思想的介入があったことが、雑誌記事の分析でわかってきた。では、なぜ、自然の友は、カラロとの関わり合いを絶つことになったのだろうか。以下、カラロの思想と行動を明らかにしていこう。

3. カラロとの断絶の事由考察

3.1. フライデンカー同盟の分裂とカラロ

カラロは、1895 年、既にフライデンカー協会の機関誌『下オーストリア・フライデンカー協会ニュースレター』の執筆協力者となっていたところから、世紀転換期にはフライデンカー運動の担い手として活躍していたことがわかる。フライデンカー協会は、1914 年から全国各地にあったフライデンカー協会を一つにして、オーストリアの統一組織を作ろうとしたが、戦争となりそれがかなわず、戦後も引き続き全国的な統括組織結成のための努力を続けていた。1921

年 8 月、指導者の一人であったフランツルが主導し、ようやく「オーストリア・フライデンカー同盟」（以下同盟と略記）が設立された［Sertl 1995: 31-37］。

カラロもこの同盟に幹部として所属する一方で、1920 年 6 月フライデンカー出版社を立ち上げ、『フライデンカー・光線』と題する雑誌の発行を開始するなど活発に動き出していた。キリスト教社会党による連邦政府は、教会を全面的に支援したため、社会民主党の教育方針や結婚についての考え方とは対立していた。1923 年には同盟を率いていたフランツルや社会民主党のグレッケルらが中心となり、教会に対する批判を繰り広げ、組織的な教会脱退推進のプロパガンダを開始する。これによって 2 万 3 千名余が教会から脱退した。こうした動きの中、同盟内でも対立問題が生じ、ユダヤ教徒幹部の存在をフランツルが知りながら黙っていたことが判明したのである。そこで、無宗教を旨とする同盟の執行部の信頼が失われ、カラロらはフランツルと対立する。1923 年 10 月、カラロは数名の幹部とともに同盟から脱退し、別の団体「フライガイスト　自由な世界観のための協会」を設立した。この分裂騒動の背後には、カラロが同盟の政治化、とりわけフランツルの社会民主党への接近を嫌っていた、という事情があった。フライガイストの定款第一条は、「協会は非政治的である」と述べ、また、その機関誌では「社会主義的世界観を持ち、社会主義的な生活指針に向けて努力はするが、…党政治からは距離をおきたい。…私たちの課題は、社会主義の代表者に私たちの要求について議会で啓蒙し、それを擁護するよう励行することである」と主張されている。ここからはカラロによる党の嫌悪が明確に読み取れるであろう［Carrao 1923: 89; Sertl 1995: 31-37, 103-105, 221-222; Steger, 1987: 230］。

この分裂後もフランツルは党への接近を繰り返し、1926 年の党大会では、リンツ綱領に「宗教は私的な事柄」という文章が入れられることに強く反対していた[4)]。1926 年 3 月には、ザルツブルクのとあるフライデンカーが、フランツルが会長であるために、フライガイストとの統合ができない、という発言を行っているところからも、フライガイストへと分裂したのは、フランツルとカラロの間に確執があったからだ、といえよう。その後、多くの幹部党員がフライガイストから脱退したが、それは「アナーキスト的なフライガイストのアクチヴ」、つまり、カラロと争ったからだったのである。同盟側は、1926 年、カラロと対立し、フライガイストに移った社会民主党寄りの党員たちを同盟に戻そうと画策した。1927 年 3 月にフランツルが、病気のために一端会長を休職した際には、フライガイストに所属していた党員たちの一部が同盟に戻り、以降、フライガイストは、独自の活動を止めている。フランツルは、同年 11 月に復職するものの、同盟内部は安定せず、結局、対立から 1928 年 10 月に辞任し、その後、フライガイストの党員は、同盟に戻った。カラロがこの時、同盟に戻ったか否かについては不明であるが、同盟は党との関係を保っていたところからカラロは同盟に関与するのを止めたのではないか、

と推定される［Sitzungprotokolle 1926; 1932; Sertl 1995: 221-222, 227-228; Steger 1987: 230］。

このような経緯から、カラロが党の関与を嫌ったことははっきりとわかるが、次に、もう少し彼の思想や立ち位置に入り込み、党を嫌った理由、そして自然の友と 1925 年以降、疎遠になった経緯を考察していく。

3.2. カラロとアナーキスト

カラロは、「神と教会なしの救済」と題する小冊子を書いていた。それがあったのは、アナーキスト、ピエール・ラミュー（本名、ルードルフ・グロースマン）の遺稿の中である。このラミューは、ウィーンに生まれ、アメリカでヨーハン・モストらと密接に関わり、ロンドンではクロポトキンと知己となり、1907 年にオーストリアに戻った後、オーストリアのアナーキスト運動内で重要な地位を占めるようになった。彼は、各種のアナーキスト向け機関誌を発行し、オーストリア各地を講演して回り、アナーキスト・グループ「無支配・非暴力社会主義者」等を設立した。大戦で兵役を拒否したため、国家反逆罪によって逮捕されたが、戦後、釈放され、1919 年に「無支配の社会主義者同盟」を設立し、戦間期は、協会活動や平和運動ならびにウィーン近郊のアナーキスト入植運動を指導した［Pavlic 2009; 田中 2002: 200, 211］。

カラロの「神と教会なしの救済」からは、彼の教会と国家の存在への反対姿勢が明確に読み取れる。この小冊子は、戦争における労働者の苦しみへの問いに対する教会の回答が、スコラ哲学的であり、社会関係を無視したものであることへの批判であり、理性的に考える人間は、自然科学、すなわち啓蒙と教養、そして自助という考え方を手段として、人間の苦しみの源を追求し、そこから解放されるために闘うべきだ、と主張されている。その一方で、教会政治に有利になるようにキリスト教という宗教が利用されているのを批判する内容をもっていた［Carraro o. J.］。この文章がアナーキストに受け入れられていたのである。一方、ラミューは、フライデンカー運動が教会という組織を否定する点は評価したが、フライデンカーは、アナーキズムの世界観と倫理によって、教会を屈服させる力を得るのだ、とも主張している。ここからアナーキストとフライデンカーの相互協力を求めていたことが読み取れる。ラミューの雑誌『知と解放』には、同時期に、ラミューらのアナーキストとともにカラロが戦争反対の平和集会で講演を行う予定も掲載されているところから、お互いに協力関係にあったといえるだろう。このアナーキストたちと交わりからカラロが「アナーキストのアクチヴ」と呼ばれていたのである［Ramus 1922: 21; 1924: 2-3］。

1924 年、『自然の友』誌は、「ロシアのアナーキスト侯爵クロポトキン」が書いた『動物・人間世界における相互扶助』（ランダウアー訳 1908 年）の内容を詳細に紹介し、生存競争と相互扶助の関係から、人間や諸民族間で起こる野蛮な暴力による殺戮の代わりに、学校や家庭にお

ける相互扶助に高い価値を置くこの本を読むべきだ、と薦めていた。この点から『自然の友』誌は、1924 年にはアナーキスト的思想を認容していたといえる［*NF* 1924: 47］。つまり、カラロがアナーキスト的な傾向があってもそれを問題視しなかった、ということである。ところが、1925 年夏にはカラロとの断絶が生じる。この 25 年春から夏にかけて、自然の友ではブルジョワ登山家協会からの小屋割引料金利用の廃止によって小屋増設の必要に迫られたことで、協会内の財政改革が行われ、高山への小屋建設のための資金調達を国内で行うことが決定され、社会民主党の資金に依拠するようになっていた。つまり、自然の友は、党との関係を強める過程で、カラロによる社会制度批判を認識し、党を批判するカラロとの関係を見直し始めたのではないか、と考えられるのである[5)]。以下、アナーキストであるカラロの思想から、彼が社会における支配手段の一つとして政党を嫌悪していた理由を追究してみよう。

3.3. カラロの思想

カラロは、世界が自然の法則により支配され、その一つが当時の先進科学であったダーウィニズムにある、とみていた。彼は、「生存競争において労働者が勝利し、社会的上昇をはかるために自然科学を学ぶ必要がある」と主張した。だが、人間も自然の法則に支配されるゆえ、生態系の一部を構成する存在として、「一つの全体 ein Ganzes」の発展を意識し、自然界の相互扶助や生命循環を尊重すべきであり、さらに、理性という権力を有する人間は、生命の創造といった責任が重い行為は慎重にすべきだ、と述べている。ただし、彼は、神が生命を一つの場所に割り当てたのではなく、生命体が自ら生活する場所を求めてそこに移り住む、ともいう。つまり、全体は重視するが、その中で調和的に生きるのではなく、自らの意志で移動した先で生存競争は生じるものの、お互いに生きるための相互扶助も行われるのであるから、それこそが自然の法則に則った生き方だ、というのである。カラロは、こうして自然は、部分だけ理解しただけでは意味がなく、相互扶助を含め全体として研究されてはじめて享受され得ると論じ、全体を重んじる自然思想を説いた。それは、自然においては、あらゆるものが相互に連関し、影響し合っている、とする思想であり、部分と部分が組み合わさって全体となる、という有機的思想でもある。エコロジーという言葉が、家計のやりくり＝オイコスに由来するオイコノミー＝エコノミーを語源とし、各集団における浪費や無秩序を回避することを意味するのと同じように、カラロの「一つの全体」という考え方は、先に紹介したフランセによる主張、「全体との調和をはかるために zur Harmonie mit dem Ganzen 自己は自然の法則に従う必要がある」［Francé 1909: 58, 80-82］とする植物と動物を含む自然との調和・一体化、相互の境界の消失を促す思想とは異なり、人間も含め、あくまでも独立した動植物による相互関係を基盤にして考える全体思想であった。そして、カラロは、生物世界における相互扶助によって成り立つの

が「生物界の社会主義」である、と主張し、それを導き出している自然の法則に人間も従っているゆえ、人間世界にも同様な相互扶助によって成り立つ「人間界の社会主義」が存在しているはずだ、とした。苦しみの源は社会的に作られたものであるゆえ、それを取り除くのが人間の相互扶助であり、これが社会主義の核心だ、と述べたのである［*NF* 1913: 115, 311-312; 1914: 22; 1925: 71-73; 古川 2008］。

カラロは、生物の生成と由来の探究にも興味をもち、当時、研究が盛んに行われていた遺伝学についてそれを、「別の核を創り出す」「生命の技術」として肯定的に捉えていた［*NF* 1913: 197-198］。彼は、自然の法則を、生命研究までに広げたのである。しかし、「全体」の中での「エコノミー」、つまり浪費を避ける発想に、種同士の闘いが加わると、どのような考えが生まれてくるだろうか。彼が第一次世界大戦中『自然の友』誌に寄せた「闘いと防衛」という論考では、木の年輪は、年を経た樹皮から朽ちていき、動物の群にはその中心に防衛しなくてはならない幼年者を置き、それを老年者が囲んで群れを作ることを真似て、戦場ではまず老人が先に犠牲になるべきである、と主張している。カラロは、同盟機関誌において「社会的な苦しみは、すべてザハリヒ（即物的）な科学や社会工学により和らげ、鎮めることができる」とも主張している［*NF* 1915: 16-17; Carraro 1923: 100］。それらの点から考えると、一つの種なり共同体なりの存続、つまり「一つの全体」を生かすためには、その中に存在する生きる価値のないものを、経済的に利用する、すなわち、先に犠牲にすべきである、という発想が示され、それを自然の法則だとみなしている可能性もあった。

さらに、カラロは、こうした動植物の「自然の防衛と闘い」においては通用した「最も力が強く、最も賢く能力のあるものが勝ち残り、その群れを支配するという原則」＝アウスレーゼが、現在の社会においては、通用しなくなっている、と述べている。その原因の一つを技術の発達に見出しているが、これは自然の障害を克服するために用いられたので意味があった、しかし、問題は、もう一つの社会的障害であり、これを克服するのは容易ではないとする。所有関係が人間の自然の欲求を最も妨げるものであり、それに政治的国民的な枠が嵌められ、さらに酷くなり、本来の動植物の群れ同士の闘いを大きく制限してしまっている。人間を含めて動植物が生態系の均衡を保ちながら地球上で自由に発達し、各生命共同体が地球全体の経済的領域を平等に分け、相互扶助的分配が平和裡に行われること、そして、どこにも質素な幸運が訪れることを望む、とカラロはいい、それを不可能にしてしまっているのが、人為的諸制度である、と主張したのである［*NF* 1915: 16-17, 195］。つまり、彼は、社会制度を否定する見解を有していた、ということになる[6)]。

オーストリアの社会民主党側の政策に影響を与え、また、実際の政策立案者であった優生学者たちの主張とカラロのそれとは、社会制度を否定する点で異なっていた。先述したゴルトシ

ャイトは、社会生物学の基本原則を「目的による自然の法則の制御」だとし、他の生物とは異なる人間は、計画的な発展を行える器官を持っているため、その発達は管理システムの改良により可能である、と主張した。そして、人間に対し経済的合理性の概念を用い、人間自体を有機的資本である、とみなす人間経済学も推奨した。人間の質についても産業生産物と同じ発想から、高価で手堅い人間は丁寧な管理育成がなされているものであり、酷使され疲弊した場合には、社会衛生的観点から準備資本としての余暇時間を与えるべきであると、述べていた。ゴルトシャイトの自然の法則についての考えや人間改良のための管理・育成という発想もカラロの考えと一致しており、ゴルトシャイトの理論に従えば、自然の友の活動は、労働者のための余暇作りを担っていることになる。自然の友が設立時から唱え、カラロも肯定していた労働者のための社会衛生という考えを、本格的に理論化したのがゴルトシャイトだったといえる［*NF* 1913: 260; Goldscheid 1908; Byer 1987: 90-93］。

また、社会工学家タンドラーは、先述した講演「戦争と住民」において、人口減少をもたらしている第一の原因は、再生産能力の高い若者による戦死だ、と主張した。「戦争により、再生産力という点で〔劣る〕「負の変種」が増えると、次世代は、こうした変種を維持し、支えなくてはならなくなる」ゆえ、この現象は「人的資本という点から正しくなく、また人種衛生学の観点からしても間違っている」と述べたのである［Byer 1987: 68-77, 80-81］。つまり、戦争によって非生産的になってしまった傷病者は、人間の資本という観点からは不必要だ、ということになる。それは、カラロによる若者の代わりに老人を戦争に出すべきである、という発想方法に類似しているだろう。

しかし、カラロがゴルトシャイトやタンドラーと異なっていたのは、その思想の中に人間を資本とし、それに投資する、という発想がなかったことである。資本は、カラロにとって生態系を土台にした社会の阻害要因であるゆえ、排除すべきものであった。また、カラロにはゴルトシャイトのいう有機的資本としての人間が、「国民の財産」であるという発想もなかった。タンドラーは、1916 年、第一次世界大戦を産業戦争として捉え、「人工的な大量の死に代えて、生殖倫理により人間を〔人工的に〕増やすべきだ」と述べて優生学を肯定したが、権力を行使することを嫌うカラロは、生命を扱う技術に対しては慎重な態度をとることを要求していた［Byer 1987: 81, 91］。

このようにカラロは、自然界の自然の法則を人間の理性で規制しながら社会全体を司る法則として捉え、生存競争や相互扶助に従うことで人間全体が一つになるとし、人為的に作られた社会的諸制度は、それを阻害する、という思想を一貫して持ち続けたのであった。つまり、カラロは、戦間期に入ってから党を明確に嫌悪して批判するようになるとともに、アナーキストに近づき、思想においても社会制度を否定する方へと向いたのである。一方、自然の友は、党

との密接な関係を欲し、また、党の方も国民の健康促進という点から自然の友を必要とするようになったため、相互依存の関係が生まれ、党を嫌うカラロの世界観を『自然の友』誌に掲載することができなくなったのだ、と考えられる。では、最後に、カラロ以外の自然に関する世界観を検討することで、カラロとの断絶後、自然の友がどのような方向を目指すのかについて提示したい。

4. 1925 年以降の『自然の友』誌に示された世界観

4.1. 社会中心主義–エーレンボーゲン

カラロが『自然の友』誌に論考を最後に載せた 1925 年 5/6 月号には、それまで『自然の友』誌にはほとんど寄稿したことがなかったエーレンボーゲン（Wilhelm Ellenbogen: 1863-1951）による「ヴァンデルンの倫理」が掲載された。エーレンボーゲンは、第一次世界大戦前よりフライデンカーに批判的であり、1926 年、「宗教は私的な事柄」という文言が入ったリンツ綱領が提示された党大会で、フライデンカーの党員によって出された動議、党綱領からの「宗教は私的な事柄」削除の要求に反対して、「科学を民衆のためのアヘンとして利用する別種の坊主たち」と述べて批判した。このフライデンカーに対する批判者の急先鋒だったエーレンボーゲンを自然の友は、党を嫌うフライデンカーのカラロの主張と並べて掲載したのである［*NF*, 1925:68-70; Steger 1987: 216］。

エーレンボーゲンは、その論考の中で、ヴァンデルンを身体能力の向上や道徳を高める活動として高く評価するとともに、「花を摘むな」といった山のギルドが作った掟を自発的に守ることではじめてヴァンデルンが民衆教育のシステムの中に繰り入れられる、と主張した。ヴァンデルンが道徳心を高めるものだ、という見解は、自然の友の設立以来唱えられてきたものである。ところが、自然の友は、同時に自然観察を通して自然の法則、つまりフライデンカー的世界観を学ぶという方針も示していた。だが、エーレンボーゲンはそれを否定する。自然は物理の実験と同じであり、純粋ではありえぬゆえ、常に誤謬を犯す、それゆえ「自然の法則は、信じない」というのである。彼は、キリストを「普遍的な人類愛」の代表者だとしてその存在を尊重していたが、宗教のドグマには反対し、フライデンカーに対しても上述したように宗教のドグマと同じだとし、「自然の宗教と社会の宗教とを区別し、自然の中にある人間が把握しきれないものを宗教だとするのは、むしろ宗教の社会的存立理由をないがしろにするものだ」と述べ、社会的原因をはっきり示すことの出来ない宗教的なものをエーレンボーゲンは、否定した［*Arbeiter Zeitung* 1895; *NF* 1925: 68; Steger 1987: 255］。

その代わりに彼が参照するのは「社会」である。彼は、自己中心主義を社会中心主義に置きかえ、衝動的なものも含めて、私たちの利益や行動はすべて全体 Gesamtheit のものである、と

いう見方を学ばなくてはならないと主張する。私的利益は全体の利益の下に置かれなくてはならない、と主張するものの、エーレンボーゲンの全体は、カラロと異なり、あくまでも人間社会の枠内に限定されていた。一方、カラロは動植物社会まで含めて全体とした。エーレンボーゲンは、オーストリア共和国の諸産業を社会化しようとしていた政治家であり、そこから発想するため、動植物も全体に含めることはできなかったのである。二人の世界観は、その準拠先も異なっており、カラロが自然の法則に求めたのに対し、エーレンボーゲンは「社会」の規範、すなわち、「山のギルドが作った掟」とした。ところが、「山のギルドの掟」とは、「花を摘むな」といったブルジョワ登山家協会の示した規則に他ならない。エーレンボーゲン自身、第一次世界大戦前にはアルペン協会オーストリア支部会員であった。つまり、彼は、自分が所属していたブルジョワ登山家協会の道徳に従いながら、社会全体の利益が高まるよう自己の利益を用いるべきだ、と主張したのである［*N. Austria* 1905: 55; *NF* 1925: 68-70; Stöger, 2008］。

こうして『自然の友』誌は、カラロとは異なる世界観を持ったエーレンボーゲンの論考を並べ、以降、カラロの随筆を掲載しなくなった。その後、誌面に現れるようになったのは、ハルトヴィヒの論考であった。

4. 2. 「外部の自然」により「内部の自然」を高める―ハルトヴィヒ

ハルトヴィヒ（Theodor Hartwig: 1872-1954）は、ギムナジウム教授であったが、1905 年からカトリック教会による教育支配を批判する学校改革運動に携わり、1908 年、その廉でウィーンからブルノに左遷され、第 1 次世界大戦後も戻らず、チェコスロヴァキア国籍を取ってそこに止まり、ブルノのドイツ系フライデンカーを率いた。戦間期には、社会主義を信奉するフライデンカーたちも、修正社会主義の方向と革命の実現を目指す共産主義的な方向に分裂したが、1925 年設立された「国際プロレタリア・フライデンカー」においても同様だった。その会長だったハルトヴィヒは、革命を求めず、プロレタリアの解放闘争において精神性を重視し、プロレタリアートの意識の中で社会主義が一つの道を指し示すものであるとし、階級闘争や科学的社会主義を通してプロレタリアートを啓蒙することで、階級無しの共同体文化をもたらすことができる、と主張した。そのため、共産党側からは、ハルトヴィヒは「一元論的啓蒙を求める通俗ブルジョワ・フライデンカー」だ、と批判されていた。但し、ハルトヴィヒは、オーストリア社会民主党の「宗教は私的な事柄」とする方針には反対しており、「私的な事柄としての宗教」は、階級なしの社会ができて、はじめて実現される、と主張し、党とは距離をおく立場をとった。そのため、党に接近しようとした同盟のフランツルとは意見を異にし、むしろカラロと同じ立ち位置にあったといえる［Sertl 1995: 109-111, 195-197, 205, 274］。しかし、思想の内容を検討するとカラロとの相違が明確に現れてくる。

1926 年、『自然の友』誌に掲載された論考「プロレタリアートの魂の解放闘争における自然の友運動の意味」において、ハルトヴィヒは、プロレタリアートの経済的、政治的、精神的解放闘争のうち、精神的解放闘争が成功しなかった理由をこう述べる。「社会主義運動において、まだブルジョワのイデオロギーが指導層にも、指導される大衆側にも、常に存在しているからである」。相変わらずブルジョワ登山家協会との繋がりがある自然の友への批判の意味も含まれていた。さらに、身体文化の形成という点からも、これまで労働者に理性を押しつけることで満足し、その欲求や感情といった本能に基づく部分を洗練することまでは考えてこなかった、とも述べて、自然科学を重視してきた自然の友を暗に批判している。そして、彼は、徹底して「プロレタリアートの魂の解放闘争」を謳い、「プロレタリア」の感情、衝動、欲望といった情緒面をも社会主義的な階級闘争のために利用するべき、と主張した。自然美の理解や自然との結びつきも社会主義を実現するための手段であるとし、未来の社会主義社会実現のために精神や肉体双方において積極的に階級闘争を行うべきだ、いうのである。そして、彼は、工場や炭坑などを見学する「社会ヴァンデルン」を勧めるとともに、自然の中でのヴァンデルンは、あくまで魂の癒しの手段とされるべきで、その際、重要なのは個人主義的なブルジョワのヴァンデルンではなく、人間関係を促進し、相互理解する手段としてのヴァンデルンであり、階級闘争の一部である身体文化を求める闘いによって社会主義思想が広まるのだ、と訴えた［*NF* 1926: 69-73］。

ハルトヴィヒもエーレンボーゲンと同様、社会を重視しているが、エーレンボーゲンが宗教的なものを一切否定したのに対して、ハルトヴィヒは「社会主義は未来への信仰」である、とも述べており、肉体労働やテーラーシステムに従事せざるを得ない労働者には身体的均衡をとるために肉体運動をさせる必要があり、それは、未来社会で生きる際の糧になる、とした。この点から社会主義を一つの信仰としてみなし、それを規範としていたといってよい。また、ハルトヴィヒは自然の法則については言及していないが、社会主義へと進んでいくという方向性を見出している点から、彼の思想の中には法則性が示唆されていた。

一方、ハルトヴィヒは、1929 年 9 月の雑誌『フライデンカー』で消極的優生学を紹介し、「私たちは、生きる価値のない生命がこの世に生まれて来ないようにしないといけない」と主張した。ドイツの精神薄弱者数や身体障害者数を示し、病人と犯罪者の関係を示唆して断種を擁護したのであった。この点でハルトヴィヒは、タンドラーら社会民主党の社会工学者たちとも意見を一にし、「今日の人口政策は、人間という資源の質を考えるようになっており、優生学的努力は人間の質改良という考えに基づいている」と述べている点で明確に遺伝という一つの自然の法則を支持していることが示された［Sertl 1995: 248］。

労働形態の変化によってヴァンデルンの重要性が認識され、社会全体へと拡大されたことか

ら、ハルトヴィヒは、ヴァンデルンを通じて外部の自然を内部の自然に役立て、階級闘争のために用いることを主張した。そして、社会主義は宗教である、とも唱えているゆえ、これらの点においてはカラロの見解と一致していた[7)]。しかし、差異もあった。カラロは、人間も含む動植物の営みが行われる自然の世界を参照しながら現実社会を想像する力を養うことを訴えたが、ハルトヴィヒは、人間の現実社会を参照すべきとしながら、そこから学ぶのではなく、現今社会を唾棄し、理想的未来社会において実現される社会主義を信頼し、その実現のために人間は、人間に役立つ資源としてのみ自然を利用すべき、と主張したのである[8)]。つまり、カラロのように啓蒙という迂遠な手段を用いて外部の自然を内部の自然に役立てようとはせず、直接的具体的に人間の生活や生に役立つものとしてのみ自然を利用し、その解決を未来に先送りしたのがハルトヴィヒだったのである。それは、社会主義に対する考え方の相違に起因した。カラロは、社会主義を信仰するが、軸足はあくまで現実社会に置き、その苦しみの源、すなわち社会的諸制度を相互扶助により取り除いて、支配から解放されることが社会主義の核心である、と述べていた。一方、ハルトヴィヒは、未来社会に視線を投げかけ、その実現に向けて闘争する必要を訴える。二人とも優生学の促進を説くが、権力支配を嫌い、現存社会に生きている人々へのまなざしを持つカラロが、優生学の適用に対して慎重であるべきとしたのに対し、それを未来のために積極的に進めようとしたのがハルトヴィヒだった。啓蒙は迂遠な方法ではあるが、生きている日常の現実社会を社会主義的発想で考察し、その問題を解決していくには有効な方法である。それに対して、現実社会を拒否し、よりよい未来社会を実現することのみ考える場合、長く続く闘争の際に必要な資源としてしか自然を捉えられなくなるだろう。つまり、自然と社会主義の関係についてのとらえ方が両者では異なっていたのである。ハルトヴィヒの世界観を検討すると、カラロの論考からハルトヴィヒの文章へとスイッチングした時点で、自然の友は、自然の法則を学び、現実社会を理解した上でよりよく生きるという方向から、直裁的に現実社会にある自然を身体のために利用して、未来の社会主義社会実現を目指す方向へと転換したといえよう。

自然の友は、こうしてカラロの論考を掲載しなくなった後、エーレンボーゲンのブルジョワの定めた掟に従いながら、社会化された未来を求める世界観を導入するとともに、ハルトヴィヒによるのと同じく、未来社会に向けた社会主義的闘争を展開させる世界観を提示するようになった。それは、社会主義が実現された世界を理想とし、そこに向けての努力を求め、人間のために役立つ資源としてのみ自然を捉えるものだった。但し、彼らの世界観は、現実社会への目線をそこから背けさせる危険性があった。一方、動植物社会まで含めるカラロの世界観は、一見すると空想的社会主義の社会構想のようでありながら、むしろ、社会の現実を見据えて批判する目を養おうとするものだった。第 1 次世界大戦前から自然の友が求めてきたこの世界観

は、自然の友協会が社会民主党との密接な結びつきを求め、また、党も自然の友を重視したゆえ、切り取られ、党による健康な「国民」からなる社会主義社会の実現に有効な世界観へととって代わられた。この時点において、世紀転換期より、リベラルな教養市民層の思想を通して自然を知り、動植物世界を観察することで自然の法則を体得し、現実社会の生き方を学ばせようとしてきた自然の友は、その方針を捨て、社会民主党が推奨する世界観を求めるようになったのである。

おわりに

1925 年から 26 年は、自然の友協会における大きな変革の時期であった。制度的には、それまで一括してウィーン中央委員会が所有管理していた協会全体の小屋建設基金を廃止し、各国別の事務局に徴収管理を任せることになった。これは、アルペン協会との政治的対立から、自然の友が自前の小屋を建設せざるを得なくなったことに起因し、さらに、ウィーンの社会民主党からの支援金が見込まれたため、それを専らオーストリア内の高山での小屋建設に充てる必要があったからである。いわば、党への資金的依存が高まったのである。こうした状況を背景にして、自然保護の論考で述べたように、1925/26 年を境に自然を経済財から文化財としてみなす傾向が生まれた。それは自然の友の党への忠誠や諂いを意味していた。同時に、啓蒙されない大衆には自然保護法を用いて自然享受から排除し、それを啓蒙された登山家たちの専有物とする方向を示唆するものでもあった［古川　2018］。この二面性が、自然理解に基づく世界観においても同様に示されたのである。

カラロとの断絶は、啓蒙への信頼と自然科学学習の重要性、人間と自然との共生を唱えるリベラルな世界観を捨て、自然を人間のために一方的に役立てて未来の社会主義社会に希望を繋ぐという党の指針に同意したことを意味していた。そして、未来社会ばかりを見つめる世界観で欠けている現実社会についての学習対象を、自然の友は、自然界からハイマート（故郷）へと転じた。自然の友が用意したのは、アカデミックグループを中心にした民俗学・ハイマート学やオーストリア内の考古学的発見についての学習であった。自然の法則を学ぶ自然科学学習よりも目でみて理解可能な、わかりやすい方法を用いて、社会民主党が進める「国民」意識を涵養するための学習を推進するようになったのである。しかし、自然を用いて身体的育成をもっぱらにする方向には抵抗も示された。1931/32 年にかけて生じた党内左派の青年たちが革命のための行動をとらない党の方針に抗議することで生じた「青年問題」に対して、自然の友は、啓蒙重視の姿勢を示し、自然科学学習を再興させることで解決しようとした。それが 1932 年、カラロの身体論をイニシアルで本誌に掲載し、また、カラロの氏名を出して 70 歳の誕生日を祝う記事となって表現された［*NF* 1932: 26-27, 159; *M. NF* (3/4): III］。そこでカラロは、外部の自

然をもっぱら身体にとりこむ思想を持ったハルトヴィヒとは異なり、身体そのものに自然の法則があると主張した。すなわち、党の勢力拡大に伴う会員の増大や党からの資金提供は資金面において価値があったため、また登山・ヴァンデルンを通じた労働者の健康増進という設立以来の活動目標を実現する必要上、党の方針に合意して従順な態度を採ったものの、自然の友は、30 年代初頭に至るまで、自然の法則を学ばせるリベラルな啓蒙という方針を捨てずにおり、党の大衆化に抵抗する面を持ち続けていたのであった。

注

1) 社会民主党の 1926 年の「リンツ綱領」では、世界観として宗教、哲学的信条、科学的信条が挙げられている点から本稿でもこの意味で世界観という単語を利用している［Berchtold 1967: 259］。
2) 本稿で用いる「国民」という言葉は、あくまで「ドイツ国民」を指しているため、必要な箇所には「」を付している。尚、オーストリアにおいては本格的にオーストリア国民意識を育成するようになるのは第 2 次世界大戦後のことである。
3) 新カント主義の影響を受けたオーストリア・マルクス主義は、経済決定論を拒否し、マルクス主義を当時の社会・自然科学に結びつけ、社会の生成・変化の過程を、上部構造概念を用いて説明しようとした。その際、人間が介在する社会科学の領域は、知の枠組として重視されていた自然科学の一元論的思考方法に適合しないため、両者の接合についての議論、すなわち、唯物論的歴史理解の有効範囲についての問いが提示された。それは、内部の自然と外部の自然という二つの自然決定要因と社会に内在する歴史という社会的決定要因をどこで区分するかという問題でもあり、人間が主体的に自然に対しどこまで関与できるのか、というテーゼを解決しようとする知の営みでもあった［Mozetič 1987; Adler 1964］。
4) 社会民主党が「宗教は私的な事柄」としたのは、もっぱらカトリック信者からなる農村地域にも進出することが企図されたからであった。
5) 管見の限り、協会誌・支部会報、大会議事録以外の自然の友の内部文書は、残っていないため、カラロと自然の友との関係については、フライデンカー協会および社会民主党の史料から推定する以外に方法はない、と考えられる。
6) カラロの思想は、優生学の生みの親といわれるドイツのシャルマイヤーWilhelm Schallmayer が主張した資本制や戦争反対の理由と酷似している。だが、シャルマイヤーが強調するのは、「国家による能率的合理的な管理」であり、カラロが否定する社会的諸制度の一つ国家を肯定していた点で異なっていた［Schallmayer　1903］。
7) カラロは、社会主義は宗教である、と明確に述べている［Steger 1987: 234］。
8) リンゼは、このハルトヴィヒの見解を社会民主党の労働者運動の自然に対する見方であるとし、エコロジーを推進したのは、「無政府主義的な周辺集団」による、としてアナーキストを評価しながら、カラロには触れなかった［Linse 1986］。

参考文献

（刊行史料）
Arbeiter Zeitung. Zentralorgan der österreichischen Sozialdemokratie, 12.2.1895, 3.
Erkenntnis und Befreiung. Organ des Herrschaftslosen Sozialismus.
M. Wien　Mitteilungen der Ortsgruppe Wien, Beilage zu Naturfreunde.
N. Austria　Nachrichten der Sektion „Austria“ des Deutschen Alpenvereins.
NF　„Der Naturfreund“. Mitteilungen des Touristen-Vereins „Die Naturfreunde“.
NF Protokoll　Protokoll der V. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu Innsbruck, Pfingsten, 1908.

Protokoll der VII. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu München, 11. und 12. Mai, 1913.
Protokoll der XI. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu Zürich, 17. – 19. August, 1928.
Protokoll der XII. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu Bregenz, 4. und 5. August, 1932.

Carrao, Angelo 1923 Die wissenschaftlichen Grundlagen des Freidenkertums, in: *Freidenker Jahrbuch*, 89-100.

――― o. J. Erlösung ohne Gott und Kirche, cited in: Andreas Pavlic, Die soziale Revolution. Pierre Ramus und die frühe SiedlerInnenbewegung in Wien (Wien, 2009, Mag. Phil. Arbeit), 34-36.

Francé, Raul Heinrich 1909 *Die Natur in den Alpen*, Leipzig, Velag von Theod. Thomas.

Goldscheid, Rudolf 1908 *Höherentwicklung und Menschenökonomie. Grundlegung der Sozialbiologie*, Leipzig, Klinkhardt.

Ramus, Pierre 1922 Unsere Stellung zu Religion und Freidenkertum in: Was ist und will der Bund herrschaftsloser Sozialisten? Bei der Landes Tagung des Bundes herrschaftsloser Sozialisten, in: *Erkenntnis und Befreiung. Organ des Herrschaftslosen Sozialismus*, IV. 21.

――― 1924 *Erkenntnis und Befreiung. Organ des Herrschaftslosen Sozialismus,* XXIX. 2-3.

Schallmayer, Wilhelm 1903 *Vererbung und Auslese im Lebenslauf der Völker: eine staatswissenschaftliche Studie auf Grund der neueren Biologie*, Jena, Fischer.
http://digital.zbmed.de/physische_anthropologie/content/titleinfo/555334 (access, 2018/11/29).

（未刊行史料）

Sitzungprotokolle　Sitzungprotokolle Parteivorstand, 10.3.1926, Freidenker, 1501, Archiv des Vereins für Geschichte der Arbeiterinnen Bewegung (VGA). Sitzungprotokolle Parteivorstand, 22.12.1932, Freidenker, 2384, VGA.

（論文・著作）

古川高子　2002「「自然」による啓蒙–20 世紀初頭オーストリア「自然の友」協会の活動から」『Quadrante ークァドランテ（四分儀）－地域・文化・位置のための総合雑誌』4: 271-300.

――― 2008「博物学とツーリズムの結合にみる政治性-20 世紀初頭オーストリア社会民主党「自然の友」協会の選択」『Quadrante ークァドランテ（四分儀）－地域・文化・位置のための総合雑誌』10: 448-480.

――― 2014「大衆政治化期オーストリアにおけるリベラル・ツーリズムの展開」『東欧史研究』36: 3-25.

――― 2018「誰が自然を享受できるか–戦間期オーストリアにおける高山植物保護」『東京外国語大学論集』96：1-19.

マルクス/エンゲルス 1996　服部文男監訳『[新訳] ドイツ・イデオロギー』新日本出版社.

田中ひかる 2002 『ドイツ・アナーキズムの成立　『フライハイト』派とその思想』御茶ノ水書房.

Adler, Max 1964 *Natur und Gesellschaft*, Soziologie des Marxismus. Bd. 2. 1930 als „Lehrbuch der materialistischen Geschichtsauffassung" erschienen, Wien/Köln/Stuttgart/Zürich, Europa Verlag.

Baader, Gerhard 2007 Eugenische Programme in der sozialistischen Parteienlandschaft in Deutschland und Österreich im Vergleich, in: Gerhard Baader/Veronika Hofer/Thomas Mayer (Hg.), *Eugenik in Österreich. Biopolitische Strukturen von 1900 bis 1945*, Wien, Czernin, 66-139.

Berchtold, Klaus (Hg.) 1967 *Österreichische Parteiprogramme 1868-1966*, Wien, Verlag für Geschichte und Politik.

Braunthal, Julius 1961 *Otto Bauer. Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk*, Wien, Wiener Volksbuchhandlung.

Byer, Doris 1987 *Rassenhygiene und Wohlfahrtspflege*, Frankfurt am Main, Campus Verlag GmbH.

Dasroteswien.at. Lexikon der Wiener Sozialdemokratie (http://www.dasrotewien.at/tandler-julius.html, 2018/08/31).

Farkas, Reinhard 1992 *Grüne Wurzelen, Ökologie & spirituelle Reform in der Steiermark*, Fohnsdorf. Verlag Podmenik.

Judson, Pieter M. 1996 *Exclusive Revolutionaries. Liberal Politics, social Experience, and National Identity in*

the Austrian Empire, 1848-1914, Ann Arbor, The University of Michigan Press.

——— 2006 *Guardians of Nation. Activists on the Language Frontiers of Imperial Austria*, Cambridge/London, Harvard University Press.

Konrad, Helmut 1982 Die Rezeption bürgerlicher Kultur in der österreichischen Arbeiterbewegung, in: Helmut Fielhauer/Olaf Bockhorn (Hg.), *Die andere Kultur. Volkskunde, Sozialwissenschaften und Arbeiterkulture. Ein Tagungsbericht*, Wien/ München/Zürich, Europaverlag, 51-60.

Linse, Ulrich 1986 *Ökopax und Anarchie. Eine Geschichte der ökologischen Bewegung in Deutschland*, München, DTV Deutscher Taschenbuch.（＝1990, 内田俊一／杉村涼子訳『生態平和とアナーキー　ドイツにおけるエコロジー運動の歴史』法政大学出版局.）

——— 1993 Das Proletariat- Komplize der kapitalistischen Naturausbeutung?, in: Jost Hermand(Hg.), *Mit den Bäumen sterben die Menschen. Zur Kulturgeschichte der Ökologie*, Köln/Weimar/Wien, Böhlau,119-148.（＝1999, 山縣光晶訳「第四章森にレクリエーションを求めた勤労者たち」『森なしには生きられないヨーロッパ・自然美とエコロジーの文化史』築地書館.）

——— 1991 Die “freie Natur” als Heimat: Naturaneigung und Naturschutz in der älteren Naturfreundebewegung, in : Wulf Erdmann/ Jochen Zimmer (Hg.), *Hundert Jahre Kampf um die freie Natur*, Essen, Klartext, 63-77.

Maderthaner, Wolfgang 2006 Austro-Marxism: Mass Culture and Anticipatory Socialism in: Austrian Studies, 14: 21-36.

Mayer, Thomas 2007 Familie, Rasse und Genetik. Deutschnationale Eugeniken im Österreich der Zwischenkriegszeit, in: Gerhard Baader/Veronika Hofer/Thomas Mayer (Hg.), *Eugenik in Österreich. Biopolitische Strukturen von 1900 bis 1945*, Wien, Czernin,162-183.

McEwen, Britta 2012 *Sexual Knowledge. Feeling, Fact and Social Reform in Vienna, 1900-1934*, New York/Oxford, Berghahn Books.

Mozetič, Gerald 1987 *Die Gesellschaftstheorie des Austromarxismus. Geistesgeschichtliche Voraussetzungen, Methodologie und soziologisches Programm*, Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Pavlic, Andreas 2009 Die soziale Revolution. Pierre Ramus und die frühe SiedlerInnenbewegung in Wien, Wien, Mag. Phil. Arbeit.

Sandner, Günther 1999 *Die Natur und ihr Gegenteil. Politische Diskurse der sozialdemokratischen Kulturbewegung bis 1933/34*, Frankfurt am Main, Peter Lang GmbH.

Sertl, Franz 1995 *Die Freidenkerbewegung in Österreich im zwanzigsten Jahrhundert*, Wien, Facultas.

Steger, Gehrad 1987 *Rote Fahne, schwarzes Kreuz. Die Haltung des Sozialdemokratischen Arbeiterpartei Österreichis zu Religion, Christentum und Kirchen. Von Hainfeld bis 1934*, Wien, Böhlau.

Stöger, Robert 2008 Der kurze Traum. Strategie und Praxis der Sozialisierung, in: Helmut Konrad/Wolfgang Maderthaner (Hg.), *...der Rest ist Österreich. Das Werden der ErstenRepublik*. Band II, Wien, Carl Gerold’s Sohn Verlagsbuchhandlung KG, 123-138.

Weindling, Paul 2009 A City regenerated: Eugenics, Race, and Welfare in Interwar Vienna, in: Deborah Holmes/Lisa Silverman (ed.), *Interwar Vienna. Culture between Tradition and Modernity*, New York, Camden House, 81-113.

Winterer, Franz 1955 Die Gruendung des Wiener Touristenvereins „Die Naturfreunde“, in: Naturfreunde-Internationale, *Sechzig Jahre Touristenverein „Die Naturfreunde“*, Zürich, Zentralausschuß der Naturfreunde-Internationale, 11-26.

Zahra, Tara 2010 Imagined Noncommunities: National Indifference as a Category of Analysis, in: *Slavic Review. Interdisciplinary Quarterly of Russian, Eurasian, and East European Studies*, 2010, 69 (1): 93-119.

Zimmer, Jochen 1991 „Grüne Inseln im Klassenkampf” ? Umweltschutzpolitik bei den Naturfreunden zwischen naturromantischer Ethik und sozialpolitischem Engagement, in: Wulf Erdmann/ Jochen Zimmer (Hg.), *Hundert Jahre Kampf um die freie Natur*, Essen, Klartext, 37-62.